
ジンとオルクの旅

カカカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジンとオルクの旅

【Nコード】

N7034Z

【作者名】

カカカ

【あらすじ】

この大陸「フィングラン」ではかつて神と魔龍による戦争が行われていた。

その戦争が終結した今、新たな時代を楽しんでいる人々に魔の手が迫る。

プロローグ 神と魔龍

今は昔の話、この大陸『フィングラン』では神と魔龍による戦いが、長きに渡って行われていました。

神はこの世界を作り出した創造主です。神はこの世界での自分の奴隷を作るために、様々な生き物を作り出しました。

人間、植物、海洋生物・・・そしてドラゴンです。そのドラゴンの中でも、特別に力が与えられたドラゴンが魔龍でした。

神に作られた生き物達は、神の奴隷となりながらもそれは幸せに暮らしていました。しかし、100年も前のこと。神が突然私たち人間をこの世から消そうとしたのです。人間が理由を聞いても、神は教えてはくれません。人間がいくら命乞いをして、神は聞き届けはくれません。

人間は最後の手段として、魔龍に神を倒すように頼んだのでした。すると、魔龍は人間たちの力になってくれたのでした。そうして、神と魔龍による戦争が始まったのです。

神は独りしか居ませんでした。その創造の力を使って魔龍たちを追い詰めます。しかし、大勢いる魔龍達は戦意を鈍らせることなく奮闘しました。

そうして神と魔龍達の戦いは50年の間も続きました。

しかし、物語に終わりがあるように、この戦争にも終わりは訪れません。

魔龍達のほとんどは神にやられました。残ったのは魔龍達の中でも特に力が大きかった7体だけです。

そして、神と魔龍の最後の戦いはこの『フィングラン』で行われました。

追い詰められる魔龍達は、最後の力を振り絞り、神を封印することに成功しました。

自分の命を引き換えにした魔龍達の魂はこの世から離れていったの

です。魂の無くなった魔龍達の体はこの世に残っています。人間たちは感謝の意を込め、魔龍達を弔おうとしたとき魔龍達の体から淡い七色の閃光がほとばしり、魔龍達は上空に消えていきました。人間たちは不思議な現象を目の当たりにしながらも、こうして生き延びることに成功したのでした

「お終い。」

しわがれた老婆の声が、言い伝えの終わりを告げる。老婆の傍でそのお話しを聞いていた少女は、目を輝かせる。

「お婆ちゃん、お婆ちゃん、もう一回そのお話をして！」

「ああ、いいよ。」

老婆は少女の頭を撫でながら、もう一度言い伝えの話を開始した。

第1話 ジンとヒイリーとオルク

澄み切った青い大空に黒い龍が飛行していた。その黒い龍は真っ黒な鱗を太陽に照らすように飛んでいる。翼や目は漆黒だった。

その龍の上に二人の人影があった。

一人は真っ黒な髪を持ち、龍と同じような漆黒な瞳をする少年だった。年は15歳くらいで、顔は整っているイケメンだった。この少年の名は「ジン」。

もう一人は真っ白な髪をする少女。雪を溶かしたように白い髪がかなり印象的だ。人目を引くその少女はかなりの美少女だ。年は10歳くらい。この少女の名は「ヒイリー」。

そして、この黒い龍の名は「オルク」。

この二人と一体は旅をしている。縛られるものは何もない、自由で快適な旅だった。

ジンは退屈そうに、腕を上に見つ直ぐ伸ばし欠伸をする。ヒイリーは暇を持て余すように少年に声をかける。

「ねージン、何か面白いことない？」

可愛らしく高いソプラノの声で尋ねてくるヒイリー。そんなヒイリーにジンは無愛想に答える。

「・・・そんなもんがあったら、俺は今頃退屈してねーよ」

ヒイリーは無愛想に返されたので、怒って顔を膨らませる。「そんなことは分かっているけどー」なんて言っている。

ジンはヒイリーを相手にしないで、龍の体から身を乗り出し地上の様子を見る。

何か面白いことがないか探すためだ。地上は見渡す限り緑しかない森だった。

少年は首を左右上下に振り、森の中をくまなく探す。

視線をオルクの進行方向に向けたとき、うっすらと髯が見えた。ジンは嬉しそうに声をあげる。

「おい！ヒイリー！国だ！新しい国を見つけたぞ！」

それを聞いたヒイリーは顔を輝かせる。トテトテ、と可愛らしい音を立てながら小走りをして、地上を見下ろす。ヒイリーは天使の様に輝かせている顔を、いつそう輝かせる。

「あー国だ！ジン！あそこ行こ！あそこ！」

ヒイリーは年齢に見合った、はしゃいだ声を出す。ジンも嬉しさで顔を微笑ましている。

「オルク！着陸だ、着陸！今からあの国の近くの森に着陸だ！」

「オオオーオオン」

ジンの命令に答えるように、オルクは鳴いた。オルクは次第に降下していき、近くの森に着陸する。

「よっと！」

ジンとヒイリーはオルクの背中から地面に飛び移る。ジンはオルクの方に向き直り、囁く様な声を出す。

「オルク、いつもみたいにごくここで留守番してるんだぞ。また大量に食料を買ってきてやるからな！」

「オオオン」

ジンとヒイリーはオルクに背を向け、新たに見つけた国へ向かう。

第2話 ジンと黒い魔法

ジンとヒイリーは新たに見つけた国の城門にたどり着いた。

城門の番人がジンとヒイリーに気づき近づいてくる。門番は人目を引く容姿のジンとヒイリーの姿を見て戸惑う。そして、主にヒイリーの事をチラチラと見ながら、入国検査をジンとヒイリーに受けさせた。

今の時代、旅をする者はほとんど居ないのであった。神と魔龍の戦い以後、人々はさらに平和な世界を得ることができたので、国を出ようと思うものなんて居なかったためだ。

厳しい検査を受け終わったジンとヒイリーが、入国を許可される。番人が簡単にこの国について説明をする。

「この国は『ギオス』といいます。農業が豊かないい国です」
自分でいい国なんていうなよ！ジンは心の中で思うが、もちろん口には出さない。

番人は説明を続ける。

「なお、この国では近頃無法者が増えていますから、旅人さんもお気をつけください。まあ、警備隊がしっかりしているので、安全でしょうが」

「はい、分かりました」

ジンは最低限の言葉で返し、ヒイリーが門番に微笑みかける。門番は一瞬で顔を真っ赤にし、卒倒した。ジンはそれを見て呆れた様のため息をつく。

「ヒイリー、お前わざとやってないか？」

「えー全然わざとじゃないよー」

ヒイリーは「ほんとだよー」と付け足し一人で城門をくぐっていった。ジンは幸せそうな顔をしている門番を見て、どうしたものかとまたため息。

これが見つかれば後で大騒ぎになるのだが、どうしようもない。毎

度のことだ。ジンは仕方がなく門番を置き去りにして、城門をくぐる。

そこは、確かにいい国だった。馬や牛が人につながれ田畑を耕し、子供は母の手伝いをしている。小さい子供は近所で遊び、市場は活気に包まれていた。

ジンとヒイリーはしばしその光景を見とれる。

「いい国だな」

とジン。

「いい国だね」

とヒイリー。

二人は市場へと入り、適当に見て回ることにする。そこには、農業の国ならではの食材がたくさんあった。ジンはその食材を売っている店主に話しかける。

「おじさん、この肉はなんなの？」

ジンに聞かれて店主は、ジンの指差すものを見て得意げに答える。

「ああ、これか。これはこの国の名産品でなウイリカブ・ロースつてんだ。この国で生産されている小麦粉の中にチーズを入れてな、この国で飼育されてる豚の中に入れて焼くんだ。

最初は強火で一気にジュワァーと焼いて、それから低温でじっくり2時間焼く。そうしてできたのがこれさ。」

話を聞いていたらよだれが出てきそうだった。ジンは我慢していたが、後ろでズズツと口で何かをすすする音がする。ジンはその正体を知っているの、これを購入することにする。

ジンも食べたかったので一石二鳥だった。オルクのお土産にもしたつかったので、軽く10人前は購入する。

他にも色々美味しそうだったり、名産品だというものがあつたので買うことにする。オルクの分は100人前は買ったであろうところ、ジンとヒイリーは国を出るために、城門の前にいた。

ジンはその重い荷物を全部一人で担いでいた。しかも片手で楽々と

周りの人々は奇異の目を向けてくる。あそんでいたこともたちが

ヒイリーはその光景に感心したような、呆れているような声を出す。

「ジンの馬鹿力ってさーすごいよね。」

「馬鹿にすんなよ」

「別に馬鹿になんかしてないよー」

笑いあうジンとヒイリーの足が止まる。それは目の前にいかにも柄の悪そうな男たちが、行く手を阻んでいたからだ。ジンとヒイリーはそれに慣れているかのように、優しい対応をする。

「どちらさまでしょうか？お兄さんたち」

男たちの中から、一番体格が大きい人が前に出てジンの言葉に答える。

「おめえら旅人だろ？身包みを全部おいていってもらうぜ」

その男の言葉に反応して、周りの男たちが君の悪い声で笑い出す。

ジンはそんなお約束な言葉を聴き、退屈そうに欠伸をした。丁度周りには人はいなかった。唯一の人の門番は国の外で気絶している。

「よいしょ」

人が力を抜くときに出すような軽い掛け声で、ジンは1tはありそうな重い荷物を地面に降ろす。ズズウウン！・・・荷物は地響きを鳴らし、大地を一瞬振るわせる。ヒイリーは荷物の後ろに隠れるようにして回り込む。ジンの怪力を見ても、男たちは一向に怯む様子にはなかった。

先ほどの体格のいい男が、ネタバレをする時のような口調でジンに話しかける。

「はっ！どうせそれも魔法の力なんだろ？恐れるになんとやらってな」

体格のいい男がそう言った瞬間、周りの男たちは先ほどよりも一層気味の悪い声で笑い始める。

この大陸では神と魔龍の戦いの後、『恵みの雨』と言われる光の雨が降った。その光の雨を受けたごく一部の人は魔法が使えるように

なったのだった。魔法という力を手に入れた人は、犯罪に手を染めるのだった。それを阻止するため、国は一般人の中から魔法を使えるものを警備隊とするのだった。なので、今魔法を使えるものは無
法者と警備隊、そしてジンのような旅人ぐらいだった。

ジンは男たちの声を聞いて背中に虫唾が走る。

「・・・やめる・・・」

「あっ？」

ジンが静かに呟いた言葉に男たちは笑いを止める。

しかし、また大声で笑い始める。今度こそジンは、聞こえるようにはつきりと言った。

「その下種みてーな笑い声をやめろって言ってるんだよ!!!」

ビリビリ・・・空気が震撼した。男達はジンの怒声に笑い声を見たりとやめる。

一瞬、呆けていた男達だったがすぐに我に返りジンに向かって怒り始める。

「なんだと、この餓鬼！」 「ぶっ殺してやる!!!」 「内蔵引き

ずり出されてーのかあ!？」等等。

ジンは一度大きく息を吸い込む。

駄目だ!こんなことで取り乱していたら、ジンはまた大きく深呼吸。男たちの言葉など耳に入っていないかった。

ジンに無視をされた男たちは、怒りのボルテージが最高潮に達し、ジンに襲い掛かった。

「ウラアアー!」

10人くらいいる男たちは一斉にジンめがけて襲い掛かる。するとピタッ!と男たちの足が止まった。

顔から汗を噴出している者もいれば、自然と足が止まっている者もあり、みんなが止まったから「じゃあ俺も」で足を止めた者もいる。この男たちの違いは、一つ。ジンの魔力を感じることができたか否か。

ジンの体からは黒いオーラみたいなのが全体から噴出していたのだ。そのオーラが魔力。体から発せられる魔力は強さの証。その量が多いければ多いほど強いということになる。

ジンの体から発せられる魔力は、常人には底知れぬものを感じさせていた。ジンの魔力は渦を巻きジンの体の中へと収束していく。

「おら、どうした？こいよチンピラ」

男たちにジンは軽い挑発。男たちの単細胞ぶりは相変わらずでジンの挑発に簡単に乗る。まず、皆が足を止めたから「じゃあ俺もー」派がジンに飛び掛る。

ジンは黒い魔力を拳に纏わせ、それを男達にぶつける。

ドウツ！黒い魔力はジンの拳の威力を数倍にするだけでなく、男達に当たった瞬間爆発した。

「ぐわっ！」

数名の男たちが一斉にスタートラインにまで吹っ飛ばされた。吹っ飛ばされた男たちは魔法はおるか魔力を練ることすらできなかったのだらう。それができるものならば、少なからずジンの力を感じる事ができるはずなのだから。ジンもそれはわかっており、一応手加減したのだが・・・吹っ飛ばされた男たちはやがて動かなくなつた。

死んだか・・・気絶か、どちらにしても悪いことしたなあ。ジンは心の中で「南無阿弥陀仏」と唱える。

ジンの拳に纏っていた魔力は、敵にぶつかると同時に消える。

吹っ飛ばされた仲間を見て、自然と足が止まった派が、ジンに背を向け一斉に逃げ出した。

「お、おい、お前ら！」

残ったのは汗を噴出した派の体格のいい男だけだった。

「くそっ！ふざけんなよ！テメーその反則みてーな魔法は何なんだよー！」

体格のいい男はジンに向かって、暴言を浴びせる。

ジンは右手を前に突き出し人差し指を立てる。そこに黒い魔力が集

中していく。

「これは、もう50年も前に消えた魔法・・・太古から存在する、ある龍の魔法・・・」

ジンが質問に答えると、体格のいい男は一瞬、ポケット、とした。そして、すぐに我に返り、ジンの魔法の正体に気づく。

「ま、まさか、その黒い魔力とこの破壊力・・・まさか、お前の魔法は・・・」

男は恐怖と絶望でうろたえがうまく回らなかった。ジンは男に最後まで言わせない。

「黒点!!!」

ジンの指先に集められていた魔力が一気に噴出す。その流星にも似た黒い光線は、男の胸に風穴を開けた。一瞬で自分の胸に穴を開けられた男は、信じられないという顔で力尽きる。

全てが終わったのを見て、荷物後ろに隠れていたヒイリーがジンに近づく。

「ジン、やりすぎだよー！あの男の人も死んじゃってるし。早くここ出ようーよ。すぐに警備隊が来るよ！」

「・・・ああ、わかってる」

ジンとヒイリーは素早く『ギオス』を出す。オルクの所にダッシュで行き、オルクと共に大空へと旅立った。

「オルク、これ食ってみろよ！あの国の名産品でめちゃくちゃ美味しいぞ」

オルクの頭につかっているジンは、『ギオス』で買った豚肉を差し出す。オルクは大きく口を開け、「食べさせて」とアピール。

ジンはオルクの口の中に肉を放り込む。オルクはそれを美味しそうに食べる。それを見ているジンも嬉しくなる。

ヒイリーやオルクが食べているのを見ていたジンは、自分も食べたくなり口に運ぶ。

「おお！確かにうまいなこのウイリカブ・ローズ」
オルクはジンとヒィリーを乗せ、真つ暗な夜空へ向かって飛行する。
自分たちには黒が似合うといわんばかりに・・・

第3話 魔龍の泉と雷の魔龍

晴れた大空に黒い模様ができている。それはオルクだ。そのオルクの背中にはジンとヒイリーが乗っている。二人は寄り添うように昼寝をしていた。

オルクは森の上を飛行している。その森の中間地点くらいを飛んでいると、ジンが突然目を覚ます。

ジンは自分がなぜ起きたか分からずに、首を左右に振って原因を掴もうとする。すると、森の辺りから不思議な魔力を感じ取った。

何だ？この俺を呼んでいるかのような魔力は・・・

ジンは肌でその魔力を感じ取り、オルクに降下するように命じる。オルクはすぐさま降下を始める。

森をしばらくぐるっと周り、魔力が流れている正確な場所を掴む。魔力が流れている場所をジンが感じ取り、その場所へと向かう。

そこは森の丁度中心にあるような場所だった。周りを木々が囲み、泉がある。その外れに家が一軒建っていた。

ジンとヒイリーを連れたオルクはその家へと向かうことにする。その家から少しはなれたところにオルクは着陸し、ジンとヒイリーを降ろした。ジンはヒイリーをたたき起こす。

何がなんだか分からないヒイリーに、ジンは状況を掻い摘んで説明し、今からあの家へと向かうことを説明する。

ギギイイイ・・・軋んだ音を立て、見るからに古い家の扉が開く。かなり古いものらしく、扉を開けると家全体が軋んだ音を立てた。ジンとヒイリーはそつと家の中に入り、家の中の様子を見る。家は一室しかない狭いもので、扉を開けるとそこは広間になっていた。素朴な部屋で、部屋にはベットと囲炉裏しかなかった。

その囲炉裏にはスープが作られていて、囲炉裏の前には寿命があと何年かというようなお婆ちゃんがあった。

お婆ちゃんが、ジンとヒイリーに向かって話しかける。

「待っておったぞ・・・『黒のドラゴンマスター』よ」

「なにっ！」

このお婆ちゃんが発した言葉『ドラゴンマスター』、ジンはその言葉に過敏に反応し、お婆あちゃんに向かって怒鳴る。

「そのの婆！どこでそれを知った！どうして俺が『黒のドラゴンマスター』だと分かった！」

「・・・今説明してやるから、そこに座りなさい」

お婆ちゃんは、どこからか座布団を取り出し、ジンとヒイリーに座るように薦める。

ジンは納得しないようだ。ここまでの怒りを覚えるジンはヒイリーはあのこと以来だった。そんなジンを見ているヒイリーは、ジンを説得する。

「ジン、あのお婆ちゃんの言う事を聞こうよ。私あの人何か大切なことを知っているような気がするの」

口から出たでまかせだったが、ヒイリーには何かそんな気がしていた。ジンもヒイリーの言ったことが、完全な嘘ではないと思い、ヒイリーと一緒に囲炉裏の前に座る。

「私の名前はミト。ミト婆とお呼び」

「婆さん・・・いやミト婆さつきはすまなかった。つい熱くなった」
ジンはミト婆に先ほどのことを素直に謝った。ミト婆はそんなことは気にも留めていない様子だった。ジンとヒイリーはミト婆に自己紹介をし、ジンは本題を切り出す。

「ミト婆・・・『ドラゴンマスター』どこでその言葉を知ったんだ？それになぜ俺が『黒のドラゴンマスター』だと分かったんだ？」

「・・・少し昔話をしようかの・・・」

昔々、人間を賭けた神と魔龍の戦い、あれはごく一部の人間から『神魔対戦』と呼ばれた。生き残った七体の魔龍は、最後の力を振り絞り神をある地へと封印した。自分の命と引き換えに。

人間たちは、魔龍は滅んだものと思っていたがそうではなかった。魔龍には子供がいた。まだ生まれてもいなかったが、確かに魔龍の子供はいた。その魔龍の子供たちは、自分と同時期に生まれてくる人間の子供たちを自らの相棒パートナーとすることにしたそう。そうでなければ、龍の子供はうまく力を使うことができなかつたそう。そうして龍のパートナーとなつた。その人間の子供たちはこう呼ばれた。龍を統べるもの・・・『ドラゴンマスター』と。その人間の子供たちは、龍の力を受け継ぎ龍の力を使えるようになったとな。

「お終い」

ミト婆が物語の終わりを告げる。ジンとヒイリーはそれを黙って聞いていた。ジンとしては、自分自身のことだからいまさら驚かないヒイリーもジンから聞かされていたので驚くことはない。

「ミト婆、確かにその本当のことだ。事実俺がそうだ。だが、なぜあんたがその話を知っているんだ」

「・・・物語にも出てきた「ごく一部の人間」それはある一族のことじゃ。その一族は神ではなく魔龍に使っていた人々。わしはその一族の唯一の生き残りじゃ」

「魔龍に使っていた人々!? そんな話は聞いた事がないぞ!？」

「・・・当たり前じゃ。その一族は魔龍にも存在を知られてはいなかった。存在が知られれば、神は怒りこの世界で天変地異が起きていただろうからな」

ヒイリーは全く話についていけなかつた。知っていることはジンから聞かされた、最低限の話だけだからだ。ジンはさっきの質問をもう一度する。

「ミト婆、さっきの質問だ。どうして俺が黒のドラゴンマスターだと分かつたんだ?」

「・・・簡単なことじゃ」

ミト婆はジンやヒイリーの後ろを指差す。ジンは振り返るがそこに

は腐りかけの扉しかなかった。

「この家の外に泉があつたじゃろう？」

「ああ」

「その泉は『龍血の泉』という」

「龍血の泉？」

「そう、そこにはわしの先祖が魔龍の血をその泉につけたことが名前の由来じゃ。以来その泉では魔龍が近くを通ると、その魔龍の事をわしらに知らせてくれたんじゃ」

ジンはミト婆のほうへと振り返る。

「ミト婆・・・」

そこにミト婆の姿はなかった。

「ついて来い、わしがやり方を見せよう」

ジンの後ろからミト婆の声がした。ジンは再度振り向くとそこにミト婆がいた。

馬鹿な、この一瞬で移動したのか！？

ジンは驚愕の表情をする。だが、今は驚いている場合ではなかった。ミト婆の後に続き、ジンとヒイリーは家を出てその外にある泉へ向かう。その泉は中央部が黒く変化していた。ミト婆が説明してくれる。

「この泉は魔龍を色で示してくれる。お主の様な黒の魔流は黒いといった風にな」

「なるほど」

ヒイリーが泉を見て、何かに気づく。

「ねえミト婆、何でこの黒い模様は変化してるの？」

「いいところに気づいたねえ、おじょうちゃん」

ミト婆がヒイリーを見る。ミト婆はヒイリーを見て顔を曇らせた。ヒイリーには聞こえないような小声でジンに聞いてくる。

「お主、この子をどこから連れてきたのじゃ？」

「えっ？」

ジンはミト婆が何を言っているのか一瞬分からなかった。その後ヒ

イリーの様子を見る。ヒイリーはジンとミト婆の顔を交互に不思議そうに見つめている。ジンはヒイリーのことを説明する。

「ヒイリーは雪の国『ホースノール』で出会ったんだ。この子はその国では生活ができないようになったんで俺が連れてきたんだ」
ヒイリーの事を聞いたミト婆は「やはりそうか」などとつぶやいている。

ジンには何がなんだか分からなかった。ミト婆はそこで話を区切るように、ヒイリーのことを置き、ヒイリーの質問に答える。

「この泉の様子が表しているのはその魔流との距離じゃ。今この黒い模様が変化しているということは、黒の魔龍が移動しているということじゃ」

ミト婆の説明を聞いたジンは黒い模様を見つめる。黒い模様は大きくなったり、小さくなったりしている。どうやらオルク行ったり来たりしている様だった。

ミト婆は泉からジンのほうへ向く。

「わしの頼みを聞いてくれんか」

「何ですか？」

「黒の魔龍をここへ呼んでくれんか」

「えっ」

どうしようかな、あまり人に見せるものじゃないけどミト婆は魔龍について知っていることが多そうだし……

「いいですよ」

ジンは人差し指と親指でわっかを作り、それを口で啜える。

ピイイイイイイイイイ……ジンから鳴らされる口笛の音は、この森全体に聞こえるような大きなものだった。

しばらくすると……

「きたっ！」

ジン達に照り付ける太陽の光を遮る様に、空から黒の魔流オルクが降りてくる。

「おお、これが……黒の魔龍……」

オルクは、ばさっ！ばさっ！と翼を羽ばたかせ、ゆっくりと地面に降り立つ。ミト婆が喜びにあふれた声を上げる。

ミト婆はオルクにゆっくりと近づき、ジンに名前を聞いてきた。ジンは「オルクだ」と答えてやる。

近づいてくるミト婆を、オルクは最初不思議な目で見ていた。だが、その後オルクはミト婆に鼻先を近づけた。ジンはその光景を見て一瞬驚く。だが、それもそうかと納得する。

魔龍は人のために神と戦ってくれた心優しき生き物だ。ミト婆はそんな魔龍に陰で使えた一族の末裔。オルクが懐くのも無理ないか・

ジンは心の中で思い、今日の前にある光景を優しく見守っている。

ミト婆は差し出されたオルクの鼻先を優しく撫で、愛しそうに自分の頬を擦りつける。

「あっ！！」

ジンの後ろでヒイリーが驚いたような声を出した。ジンはヒイリーに振り返る。

「どうしたんだ？」

「これ見てー」

ヒイリーの指は泉の中央に向いていた。今オルクが泉に最大限まで近づいているので泉のほとんどは黒に染まっていた。だがその中で黒ではない部分があった。その色は泉の中央から少しずつ広がっていつていた。

それは、黒と黄色を混ぜたような色だった。・・・黄色？

「ミト婆、これは・・・！」

ジンがミト婆にどういうことが説明を求めようと振り返ると、そこにはもうミト婆がいた。

また一瞬で・・・

ミト婆は池の混乱している色を燻しがけに見る。

「これは・・・珍しいこともあるもんじゃ」

「どういうことだ？」

「これはこの泉に別の魔龍が近づいてきている証拠じゃ」
「なっ！」

ジンは言葉を失った。今までの長い旅の中でジンはまだ別のドラゴンマスターと魔龍に出会ったことがなかったのだから。泉に新しく出た黄色はどんどん広がっていく。

「その魔龍はどんな奴だ？」

黄色の色は、黒い色と同じくらいにまで大きくなる。

「この黄色の色は・・・雷の魔龍じゃ！！」

「か、雷の魔龍！？」

ドンッ！！！！

大地が震える。その物体が飛来した部分は土が捲れ上がり、少し焼け焦げたような跡がある。

ジンは音がしたほうを振り向く。

そこには魔龍がいた。黄色の鱗をまとい、体からは電光が迸っている。こいつが雷の魔龍だろう。

魔龍の背中から一人の少年が姿を現す。

第4話 黒のドラゴンマスターと雷のドラゴンマスター

雷の魔龍から少年が降り立つ。

「黒のドラゴンマスターはお前だな」

黄色の髪をした少年はジンを指差す。

「殺ろうぜ」

黄色の少年が突然がジンに向かってダツシユ。拳を振り上げジンに殴りかかる。その拳には黄色い魔力を纏っていた。

ドン！ ジンの立っていた場所から地面が盛り上がった。

「………いいね」

黄色の髪を持つ少年が嬉しそうに言う。

ジンは殺られてはいなかった。少年の黄色い魔力を纏った拳を、ジンは黒い魔力を纏わせた拳で相殺していた。

少年は地面をタンツと蹴りジンから距離をとる。

「我の言葉に答えよ。我が名はライチ。魔龍の名はジルバーン、雷の魔龍。私の望む物は「雷龍剣」(らいりゅうけん)！」

少年が呪文のようなものを唱えると、その手に剣が出現した。少年はその剣を肩に担ぎ、切っ先をジンに向ける。

剣には黄色い魔力が纏っており、バチバチと音を立て放電していた。

「くらえっ！雷刃斬！！」

少年は剣をジンに向かって振り下ろす。剣にたまっていた魔力が爆発するように開放される。開放された魔力は剣の形を保ったまま、一直線にジンへと向かっていく。

「！！！」

ドウー！！ 先ほどの攻撃より2倍以上の爆音が鳴る。

「ぐはっ！」

ジンは真後ろへと吹っ飛ぶ。吹っ飛ばされたジンはそのまま木へと激突する。体の衝撃でジンは口から吐血する。

「ジンー！！」

ヒイリーがジンの元へと駆け寄る。

黄色い髪の少年は剣を虚空へと誘わせ、つまらなそうに呟く。

「ジルバーン、ほんとにあいつが最強のドラゴンマスターなのか？

弱すぎだぜ」

雷の龍は少年の質問に答える。

「あの少年はおそらく何も知らないのだろう。力の使い方や、これからのこと」

「ふんっ！まあ、あいつは戦闘の才能はありそうだな。龍の記憶がないくせに攻撃に魔力を纏わせていたし」

「相変わらず戦闘狂じゃのう、ライチよ」

少年は声のしたほうを振り向く。そこにはミト婆がいた。

「久しぶりだなミト婆。俺的にはあんたと戦えると嬉しいんだけどな」

少年は期待するように言う。だがミト婆はそんな少年の期待を裏切るように言う。

「わしはそんな気はないよ。それよりジンに手を出してんじやないよ。ドラゴンマスターの手合わせは最低限という決まりを忘れたのかいー！」

「大丈夫だよミト婆。こんなことで死ぬぐらいの奴なら、近い未来に起こる「神魔対戦」で役に立たないだろうからな」

「何が大丈夫なのだ？ライチよ」

雷の龍が少年に突っ込む。

「ジン！ジン！大丈夫？」

ヒイリーが必死に呼びかける。ジンはその呼びかけに応える様に体を起こす。

「あ、ああ。」

ジンが体を起こそうとすると、そこに少年がいた。

少年はジンに向かって手を差し伸べる。ジンはその手を素直に受け取り、痛む体を何とか起こす。奇跡的に怪我はなかった。

「やるじゃねーか、黒のドラゴンマスター」

「そつちこそ、雷のドラゴンマスター」

少年とジンが握る手を離さずに互いを褒め合う。

何でこの二人さっきまで殺しあっていたのに、こんなに仲いいの？ヒイリーに素朴な疑問が心にできた。

第5話 神と封印

「さつきは悪かったな」

少年がジンに向かって謝る。

「ああいいよ。そつちこそ手加減してくれていたんだろ」

「なにっ！」

少年が少しだけ驚いた表情をする。

「殺気がなかったからな」

「・・・気づいていたのか」

少年はジンを殺す気など毛頭なかった。ジンの実力を試すためと、自分が戦いたかったからだ。（8割自分が戦いたかった）

少年は嬉しそうに言う。

「いいなお前、もう一回殺るか？」

好戦的に言う少年の申し出をジンは断る。これ以上怪我をしてはたまらなかったのだ。

「それは残念」

少年は本気で残念がっているようだった。

そこにミト婆が入ってくる。

「ほら、お前たちそんなこと言ってないで自己紹介せんかい」

二人のドラゴンマスターはミト婆に言われ互いに自己紹介をする。

「俺の名前はジン。知っていると思うが黒のドラゴンマスターだ。外にいる黒の魔龍の名前はオルクだ」

ジンが自分のことについて名乗る。

「俺はライチってんだ。俺の雷の魔龍の名前はジルバーン」

ライチが自己紹介をする。そこで、ジンの横で隠れるようにしているヒイリーに気づく。

「その子は？」

「ああ、この子の名前はヒイリー。訳あって一緒に旅をしているんだ」

「旅？」

ライチはヒイリーの話題はどつでもいいという風に、話題を別のところに振る。

「旅つてのは何を目的にしているんだ？」

「それは自由気ままな旅で」

ハアアー・・・ライチは長いため息をつく。

「ミト婆、教えてないのか？」

「お前の口から説明しておやり、わしは面倒くさいよ」

ライ値はもう一度浅いため息をつく。「参ったな、俺説明とか苦手なんだよな」などと呟く。

「まず結論から言おう」

ジンとヒイリーは何がなんだか分からなかった。

「近いうちに封印されていた神が復活する」

『なっ！！』

ジンとヒイリーの声が重なる。

「どうして・・・」

「かつて魔龍達は自分たちの命と引き換えに神に強力な封印魔法を施した。その封印が解けつつあるんだ」

「それは本当か？」

ライチはジンの質問に答えようとはせず、逆に質問をする。

「ジン・・・だったか、ドラゴンマスターの本当の役目は何だと思っ？」

「えっ、それは」

「いいかよく聞け」

ライチは一泊置く。

「ドラゴンマスターの本当の目的は・・・幼い魔龍とともに神に立

ち向かい、そして命をかけて永遠に再封印することだ!!!」

ジンは言葉が出なかった。ヒイリーも叱り。

「本来魔龍の寿命は約1000年。俺たちの龍が生まれたのは、少しの誤差はあれど約15年程度しかたつてない。まだ子供どころか乳児のレベルだ。そこで俺たちドラゴンマスターが手を貸し、魔龍たちの力を最大限まで引き出し、そして魔龍と俺たちの命を懸けて神を封印するんだ!」

ジンの呼吸は次第に荒くなる。ヒイリーは今の話より、ジンの容態の方が気がかりだった。

「だが俺は封印のために死ぬつもりはない!神が封印から復活するまでの間、俺は力をつけ神を倒してみせる!!!」

ジンの呼吸は、少し離れているミト婆のところまで聞こえるくらいに大きくなった。

「だから、ジン。お前も封印をしようとはするなよ。あれと一緒に力をつけ・・・」

バタンツ!!

ジンの体が床と同じ高さになった音がした。ジンは横向きの体勢で、大きく呼吸をしている。ミト婆が近寄ってくる。

「いかんっ!過呼吸じゃ!ジンツ大きくゆっくり息を吸い込むんじや!」

「ジンツ!ジンツ!」

ミト婆とヒイリーがジンを呼びかける。
ジンの意識は暗闇へと消えた。

第6話 白の魔龍と予言

「ここはどこだ？」

ジンは暗闇の中にいた。どこへ行っても暗闇ばかりの世界だ。ジンはそこに座り込み、さてどうしたものかと考えていたら、

パアアアア・・・と暗い世界に優しく暖かい白い光が差し込んできた。その光は次第に大きくなり暗い世界を半分ほど白くしたところで、光の侵食は止まった。

そこから一体の龍がジンの前に姿を現した。

「なんだ？」

龍は、白い光に溶け込むような白い鱗をしていた。ジンを見下ろす純白の瞳は何かを告げているようだった。

「何だ、何が言いたい？」

ジンが必死に呼びかけたそのとき、

「・・・私は白の魔龍、ミアバート。予言をつかさどる者なり。黒のドラゴンマスター、ジンよ。今からお主に一つの道標を授ける。」

そういうと、白の魔龍ミアバートは白い光の中へと消えていった。

「おい、待ってくれ！ミアバート！」

ジンは必死に呼びかけるが、ミアバートは完全に光の中へと消えた。

その時、ジンの頭にある映像が流れ込んできた。

「これは・・・」

その映像はある孤島。その孤島は黒い雲に包まれており、絶えず雷が鳴っている。その中心、そこには洞窟があり一つの剣と

石が収められていた。

「ここに……」

ジンは我に返り、もう姿が見えない白の魔龍に伝えるように叫ぶ。

「ここに行けばいいんだな！ミアバート！」

スープの臭いがジンの鼻を擽る。ジンは目を覚ます。ぼそっ、とジンは無意識に呟く。

「……ミアバート……」

「ミアバートって誰？」

ヒイリーが嬉しそうにジンに囁きかけた。目を覚ましたばかりのジンには、ヒイリーの綺麗なソプラノはとても心地よく感じられた。

「目を覚ましたかい」

囲炉裏でスープを作っていたミト婆が、スープを持ってジンに差し出す。

「これを食べな、頭がすつきりするよ」

ジンはスープを受け取る。

俺は何で寝ていたんだ？確か……

ジンは勢いよく立ち上がり、辺りを見回す。だがライチの姿はない。

「ミト婆、ライチは？」

「ライチならもう行ってしまったよ。せつかちな奴じゃ」

ミト婆は、中途半端に開けられた扉を指差す。

「そうか、ライチは行ったのか」

ジンは残念そうに言う。

もっというる聞いたかったのにな……

「ねえ、ミアバートって誰なの？」

横でヒイリーが質問してくる。ジンはヒイリーの質問に答える。

「俺は気絶しているときに夢を見たんだ。そこではミアバートっていう、白の魔龍が俺に道を示してくれたんだ」

「白の魔龍？」

ヒイリーは上ずった声を出す。

「ほう、白の魔龍」

「何か知っているのか、ミト婆？」

ミト婆は切羽詰ったようなジンを見て、少し驚く。

「白の魔龍はほかの魔龍とは違い、特殊な力を持っているのじゃ」「特殊な力？」

「そう、それは予言じゃ！」

予言・・・まさか新たな神魔対戦っていうのは・・・、ジンの頭の中で一つの答えが出る。

「まさか、ライチの言っていたことは全てミアバートの予言？」

「ほう、よく気づいたのう。そのとおりじゃ。それでミアバートはなんて言っていたんじゃ？」

ミト婆は感心したように言う。ジンは夢でミアバートが言っていた言葉を思い出す。

「・・・俺に道標をやるって」

「それはどんな？」

「孤島が見えた。その孤島には洞窟があり、その洞窟には剣と石があっただ」

ミト婆は、しばらく何か考える。そんなミト婆にジンは痺れを切らす。

「ミト婆、俺はこれから何をすればいいんだ？」

「ジンよ、ライチは呪文を使って剣を取り出していたじゃろう？」

ミト婆はジンの質問には答えない。ジンは仕方なく答える。

「ああ」

「ドラゴンマスターにはそれぞれの系統に合った宝剣があるんじゃ」

「宝剣？」

「そう、その宝剣を使うものは力が数倍にもなるといわれているものじゃ」

ジンは数倍という言葉に過敏に反応する。

「ジンよ、お前はこれからその孤島を目指すんじゃ」

「ああ、俺もそれがいいと思う」

ジンはスープを一気に飲み干し、立ち上がる。

「ミト婆世話になったな。どうやら時間はあまりないようだ。俺たちはもう行くよ」

「ああ、しっかりやるんじゃぞ・・・あ、その前に」

ミト婆は懐から手紙のようなものを取り出す。

「これはライチがジンへと書いたものじゃ、道中に読んでおくといい」

ジンはミト婆から手紙を受け取る。

「ミト婆、ありがとう」

ミト婆に礼をいい、ジンは古びた扉をくぐる。そして、ヒイリーが外へ出ようとしたときに、ミト婆はヒイリーを呼び止める。

「ヒイリーよ、お主はジンの力にならなければいけない。しっかりやるんじゃぞ！」

「?・・・はいっ!」

満面の笑みをミト婆に向け、ヒイリーはジンとともに外へと出て行く。

ジンはオルクを呼び、オルクに乗って大空へと飛び去る。

ミト婆はジンたちの去った方向を見つめていた。

「ヒイリー・・・か。もしかあの子は・・・」

ミト婆は独り言を呟き、ドラゴンマスターを待つため、家の中へと入っていく。

第7話 ジンとヒイリー 出会い？

そこは雪が降る寒い国。その雪は途絶えることなく国に降り続けている。その国の名前は「ホースノール」。

「うー寒い」

ジンはオルクと一緒に旅をしていた時その国に差し掛かった。

「オルク！あの国でひと段落しよう！」

「オオオーン」

オルクは急降下し、ホースノールの近くに着陸する。

門番がジンの審査を終え入国を許可する。重たい扉が開かれジンは国の中へと入る。

「さて、ここはどんな国なんだ・・・」

ジンは国の中へ入ると不思議な光景を目にした。

「おかーさん開けてよー、お願いおかーさん」 「僕何にも悪いことしてないよ？おとーさんおかーさん」 「寒いよー寒いよー・・・うわーん」

家の一軒一軒の玄関で子供たちが泣き叫んでいた。様子からすると、全員家の中へ入れてもらえないようだった。

ジンは近くにいる人から状況を聞こうとする。

「これは・・・どうなっているんですか？」

「おや、あんた旅人かい？」

中年の男性がジンに質問する。ジンは頷くと、男性は説明してくれた。

「今この国では試験の最中なんだ」

「試験？」

「そう、この国ではその年で10歳を迎える子供に一夜の間外へ放り出すんだ。この国での寒さは本とに尋常ではなくてね。今はまだ暖かいほうだけど、この国での最低気温は今の-20度だ。

だから、この程度の寒さを乗り切れない子供は、将来大人になって農業をしても、いつか死んでしまうんだ。で、ここでふるいにかけられるってわけさ」

ブルツ！

ジンは寒気を覚えた。

じよ、「冗談じゃないぞ！今の気温は0度に達しているか達してないか位寒いんだぞ！そんな中に防寒着を着ていない子供が一夜の間ずっと過ごしていたら・・・」

ジンは辺りを見回す。

よく見れば大人たちは全員半袖を着ていた。この寒い中に、この国では今が夏のようにだった。

「獅子は子を戦塵の谷へ突き落とす・・・この国ではそんな言葉がぴったりだと思わないかい？」

男がジんに同意を求める。ジンは頷く。

「んっ？」

ある一軒の家の前に一人の少女が座っている。その少女は泣き叫ぶこともなく、家の階段の前で体育座りをしていた。少女は薄着のブラウスを身にまもっている。夏ならば快適だろうが、今のこの状態では自殺行為に等しかった。だが少女は身震いすることもなく、ただじっと座っていた。

「あの子は……」

ジンの様子に気づいた男がジンの見ている少女に気づく。男の顔は一瞬で不機嫌なものに変わった。

「あの子の名前はヒイリー」

男は頼んでもいないのに、ジンに説明をしてくれた。

「あの子は化け物だ！」

「どういうことですか？」

確かに、あの少女はこの寒さには恐ろしいほど強いがそれだけで、化け物なんて……

「あの子は龍の子だ」

「龍の子?!?!?」

「……いや、そんな噂があるだけだ」

「噂……ですか」

ジンは拍子抜けをする。

あの少女が龍の子……もしかしてあの少女はドラゴンマスター!?!?!? いや、そんなわけないか……

ジンは心の中で思う。今のところあの少女からは、特別な魔力を感じない。もし、ドラゴンマスターなら龍の力を借り、寒さを防ぐなどわけがなかったからだ。

「あの子の両親が言っていた話なんだが……」

男は一泊置き、喉を鳴らす。

「あの子が暖炉の前にいるとき、あの子から伸びている影が龍の形に見えたそうなんだ……」

「……見えただけじゃないんですか？」

ジンは誰もが思うようなことをとりあえず質問する。男は「それだけじゃないんだと」前置きをし、確信に迫るようにいう。

「かつての神と魔龍の戦いで、最後まで残った龍がなんだか知っているか？旅人さん」

ジンは首を横に振る。本当はいくつか知っているのだが、もしかしたら知らない龍が出てくるかもしれないので、期待を持つことにする。

「残った龍の中には・・・氷の魔龍が居たそうなんだ」

「氷の魔龍！？」

初耳だった。今ジンが知っているのは、黒の魔龍と白の魔龍ぐらいだったから。

男はその龍に実際に会ったことがあるように身震いをし、知っていることをジンに話す。

「その龍は、迫りくる神の軍勢を絶対零度の息で凍らし、吹雪を巻き起こす力を持っていたというんだ。しかもその龍は、マグマの中に飛び込み己の持つ体の冷気だけで、マグマの海をスケート場のように氷漬けにした・・・」

「・・・氷の魔龍・・・」

ジンは呟く。

そんな龍がいたのか・・・まったくオルクも教えてくれればいいのに・・・

「それであの子は寒さに強い・・・いや強すぎるだろう！！」
男はジンに顔をグイッと近づける。ジンは顔を縦に振る。

「それで俺たちはあの子は龍の子ではないかと噂する様になったん

だ。氷の魔龍ならこの程度の寒さは、裸で一年いても平気だろうし」

男はそれだけいうと立ち去ってしまった。

それだけで、あの子を化け物扱いしなくても・・・ジンは心の中で思った。

とにかく、あの子がドラゴンマスターかどうか確かめる必要があるな・・・

ジンは少女へと近づぐ。

少女は目の前にいるジンを不思議な目で見ている。

「やあ、君の名前はヒイリーって言うんだろ？」

どうしてこの人は私の名前を知っているの？・・・ヒイリーは少しの間考えたが、すぐにその原因が国の大人たちだとわかる。ヒイリーも自分が化け物に見られていることを知っていたからだ。

「・・・あなたは誰??」

ジンは一泊置き、囁きかける様に答える。

「俺の名前はジン・・・黒のドラゴンマスターだ」

「黒の・・・ドラゴンマスター?」

ヒイリーの反応は微妙なものだった。

・・・このヒイリーって子、ドラゴンマスターを知らない。この子はドラゴンマスターではないのか?・・・

陣は考えるが、もう少し判断の材料を集めることにする。

「ヒイリー・・・暇か?」

「?・・・うん」

綺麗なソプラノの声で、消え入る様にヒイリーは頷く。

「俺と遊ぼうぜ」

「!」

ヒイリーは不意を突かれたようだった。ジンはヒイリーの名前を知っているということは、ヒイリーが化け物扱いをしていることも知っているはず・・・とヒイリーは考えていたからだ。だが、ジンはそんなヒイリーに遊ぼうと申し込む。ヒイリーはうれしさを覚えたのだった。

「・・・うん」

先ほどとは違い、元気よく答えたヒイリー。

・・・これがジンとヒイリーの出会いだった・・・

第8話 ジンとヒイリー 出会い？

雪球・雪合戦・雪だるま・かまくら・・・雪なら無限にある国、スノーホール。

ジンとヒイリーは時間を忘れて、楽しく遊んだ。

「ジンありがとう！私とっても楽しかった！」

「そうか、そりゃ良かった」

雪が織り成す芸術的な美しい世界も、夜が訪れる。

「暗くなってきたな」

そろそろ、ヒイリーに見せるか・・・

「ヒイリーちよつと来いよ」

「？」

ヒイリーはジンについていく。

ジンは城門の前に来ていた。

「ジン、私国は出られないよ」

「大丈夫だって、ちよつと出るだけだから・・・」

「駄目だよー、見つかったら大騒ぎに・・・きゃっ！」

ジンはヒイリーを抱きかかえる。

「見つからなきゃいいんだろう？」

ジンは軽く片目を閉じて、得意げに言う。暗くて分からなかったが、ヒイリーの顔は赤く染まっていた。

「よっ！」

ジンは地面を蹴り、高さ20m以上はある城門を軽々と飛び越える。

「キヤーーーーー」

ヒイリーの絶叫が夜の闇に響き渡る。

タンツとジンは地面に着地する。ヒイリーを下ろしたジンは、暗闇の中を歩いていく。

「ジン待つて！」

ヒイリーは後ろから追いかける。

「ジン、あなた何者なの？」

ヒイリーはジンに質問する。言葉は疑っているものだったが、口調はジンを信頼しているものだった。それはジンも承知しているが、今は秘密をしゃべることはしなかった。

しばらく歩くと、ジンとヒイリーはオルクの元にたどり着く。

「あつ！」

ヒイリーの驚いた声。しかし、その声に恐怖はなかった。

「オルク、ちよつと客を連れてきたぞ」

「オオン？」

体を伏せていたオルクはジンの声に気づき体を起こす。目の前にいるヒイリーを、オルクは不思議な目で見つめる。

「ジン、この龍は・・・」

「こいつの名前はオルク・・・俺のパートナーの魔龍だ」

「魔龍！！？」

ヒイリーは魔龍と聞いても驚くだけで、恐怖はないようだ。そんなヒイリーにオルクは警戒心を抱かず、ヒイリーを口でつまみ上げ、背中に乗せてやる。

オルクはヒイリーに警戒心を全く抱いていない？・・・魔龍は人に優しいが、ここまで簡単に接することはないはずだが・・・

ジンの中で、ヒイリーがドラゴンマスターという説が大きくなるが、それは確信には変わらなかった。ヒイリーは魔力を発していない。ジンは人の魔力を感じることができる。本人は意識していなくても、

魔力は勝手に体から漏れるものなので、それをジンが感じることはできないはずがなかった。

やはり、ヒイリーはドラゴンマスターではない？・・・ヒイリーはオルクに懐かれただけ・・・か・・・

ヒイリーとオルクは楽しそうに遊んでいる。ヒイリーもドラゴンマスターならば、自分のパートナー以外の魔龍にここまで接せられるものでもなかった。

ジンの心の中にある「ヒイリーはドラゴンマスター」説はもう完全になくなっていった。

タンツ！軽やかに奏でられる音と共にヒイリーを担いだジンの体は20m以上も跳躍する。

もう深夜になっていた。泣き叫んでいた子供たちも、疲れ果てて眠っていた。その中には、もう永遠に動くこともない子供もいた。

ジンはヒイリーを連れ帰り、国を出ようとする。それをヒイリーは必死に止める。

「待って！ジン、私も連れてって！」

「なにっ？」

ジンはヒイリーの頼みを聞き困惑する。ジンのしている旅は、特に危険というわけでもなかったが、何が起こるかわからない旅だった。そんな世界にヒイリーを連れて行くことはできない。

「私はこの国にいたら・・・いつか殺されてしまうの！」

「どついうことだ？」

ヒイリーは目から一粒涙を流す。その涙は頬伝い、地面に落ちる。涙を含んだ雪は少し溶けた。

ドンッ！ジュワァー！

その時、雪の溶ける音を何10倍にもしたような音が、ジンの背中に直撃した。

ジンの服は破れ、背中は少し溶けていた。皮膚は溶かされ、ジンの背中は肉を露にしている。

「すまない、旅人さん。あなたも一緒に死んでもらうことになったよ」

後ろから聞こえる、雪よりも冷たい声。ジンは振り向く。そこには、国で農業をしていた人々だった。その先頭には、ジンにこの国のことを説明してくれた男がいた。

その男の手からは湯気が発しており、周りの雪は触れてもいないのに溶けている。

「あなた、警備隊だったのか・・・」

「そう、この国では試験のせいで、人口が少なくてね・・・魔法を使えるものは農業と警備隊を兼業しなくてはいけないのさ」

ジンは焼けるような痛みを発する背中をさする。さすった手を見ると、少し皮膚が溶けていた。これは、火炎魔法ではなく、酸性の魔法だ。

「なんで!？」

ジンの怒気と疑惑を混ぜた声。

「実はあなたがヒイリーに話しかけていたときから、あなたを付けていたんだ」

「なっ!」

じゃあ、オルクのことも・・・

「あなたがヒイリーに接してくれるおかげで、ヒイリーが龍の子かどうか分かると思ったんだ・・・するとどうだ！旅人さんも龍の子

だつたじゃないか!？」

「ちがつ……」

俺はドラゴンマスターだ……そう弁明したいのに、背中の痛みが邪魔をする。

「だから俺たちは確信した。ヒイリー……いやその化け物も龍の子だつて……だからあんたたちは死んでもらう」

男は周りの警備隊に『殺れ』と命令をする。数人の男たちが前に進み出て、呪文を唱える。

「天に栄える業火の炎よ……私たちを守り、敵を滅ぼせ」

まずいつ!これは……ジンの防衛本能がフル回転。

「ヒイリー、俺の後ろに隠れている!!」

ヒイリーはすばやく行動。だが、その間にも男たちの呪文は進む。

「我らが使いし火炎はマグマに匹敵する炎……エントロ・グラン
!!」

男たちの中心から魔力でできた炎が渦を巻く。収縮された炎は一直線にジンに向かう。

「……フザ、ケルナ……」

ジンは呟く。マグマの業火はジンの心臓めがけて、迫ってくる。炎が通った後には、ジュウウと音が鳴り雪は跡形もなく溶けていく。

「俺やヒイリーが龍の子?……化け物?……フザケルナよ」

ジンは己の拳に魔力を集中させる。その拳はジンの前で弧を描き、円が出来上がる。その黒き円はジンを守るかのように消えない。

マグマの業火と黒きシールドがぶつかる。

バアアン！！

すさまじい轟音が鳴る。マグマの業火は生み出された煙を振り払うかのように、黒きシールドにまとわりつく。誰もがマグマの業火が勝ったと思った。その瞬間……

ドウツ！と音が鳴り黒きシールドが四方に散らばり、その衝撃でマグマの業火は跡形もなく消えた。

「なっ！」

警備隊は声も出ない。

「……フザケルナー！！！」

ジンの一声。その声に、この場にいる誰もが口を閉じる。

「ヒイリーが龍の子だろうと、化け物だろうと、この子が殺されていい理由にはならねーんだよ！！お前ら大人だろ？警備隊だろ？なら、この子の側についてあげるべきだったんじゃねーのかよ？それがよってたかって……この子を殺そうとして……ふざけてんじゃねーよ！！！！！」

「黙れ！！！」

声を出したのは、ジンにこの国のことを教えてくれた男だった。

「何も知らない餓鬼がっ！この国の先祖は神に忠実に仕えていた！だからっ！この国から、神に逆らった龍の子供だと居てはいけないんだ！！！」

「それがどうした！？」

「何!？」

「だから、そんなことでっ!こいつが殺されていい理由にはならね
ーんだよ!!!」

「ぐっ!この餓鬼!囟に乗りやがって!そんなに死にたいのなら、
今すぐ殺してやるっ!」

「来いよ!核の違いを見せてやる!・・・俺が、ヒイリーが化け物
じゃないと認めさせてやるっ!!!」

第9話 ジンとヒイリー 出会い？

「黒点！」

ジンの指先に収束された黒い魔力が一気に放出。警備隊が一気に吹き飛ぶ。今は10数人居たのに対し5人ほどになっている。

「馬鹿な、その黒い魔力とこの破壊力・・・お前のその力は・・・黒の魔龍のもの！」

「うらー！」

男の言葉は恐怖で震えていた。自分から勝負を挑んでおきながら、ジンの力を知り怯えている。

ジンは手に魔力を集中させ、さらに2人を気絶させる。

「お前は、黒の魔龍の子なのか!？」

「俺は龍の子じゃねえーって、さっきから言ってるんだろ！」

ブウウウン・・・ジンは魔力を拳に集中させる。羽虫のような音が鳴り響き、警備隊にチェーンソーを連想させる。

ジンの拳に集中した魔力は次第にその形態を変化していく。黒い魔力は拳に纏ったまま、刀状に変化していく。

ジンは黒い魔力でできた刀を握り、さらに魔力を開放する。

「や、やめる・・・やめてくれ・・・もうヒイリーを殺そうとはしないから！」

男は必死に命乞いをする。ジンは聞く耳を持たない。

「黒刃撃こくじんげき!!--」

ジンは刀を持った手を、縦に一線。

ドウッ！

すさまじい轟音になり、先ほどまで男たちがいた場所は、巨大な刀で切られていたようになっていた。ジンの手にあった魔力の剣は、この技の発動とともに空に消える。

「はあっ、はあっ」

「ジン！」

物陰に隠れていたヒイリーが、ジンに飛びつきその胸に顔をうずめる。

「すごくかつこよかった！」

ヒイリーが夢見る少女のように言う。ジンは苦笑する。

ここは国のはずれだったが、戦闘の爆音で寝ていた住民が騒ぎ始めていた。

「・・・ヒイリー」

「うん？」

「俺と一緒に来るか？お前はもうここでは生活することはできない。だから・・・」

「私の答えはもう決まってる！」

ヒイリーはジンに屈む様をお願いする。ヒイリーは自分と同じくらいになったジンの横顔に、自分の顔を近づける。

「 私はジンと一緒にいきます！」

そっと耳打ちし、ヒイリーの唇がジンの頬に触れる。

「 なっ！」

ジンは雪が溶けそうなくらいに顔を真っ赤にし、思わず跳び退く。ヒイリーも顔を真っ赤にしているが、ジンのように顔を硬直させることなく、満面の笑みを浮かべている。

「なんだなんだ？」 「何か大きな音しなかったか？」 「・・・キヤー、皆来てー、警備隊がー」

目を覚ました住民が口口に叫んだ。
時間がないな・・・

「ヒイリー、行くぞ！」

ジンは照れながら、ヒイリーの頭と膝を支えながら横向きに担ぐ、いわゆる王女様抱っこをしながら、城門を飛び越え、オルクの元へすぐに向かう。

バサツ！・・・バサツ！・・・オルクが翼を羽ばたかせ、雪が降り続くスノーホールの上を飛行する。

「ヒイリー、本当によかったのか？」

「何が？」

ジンはヒイリーの顔を見る。すごく幸せそうだった。

もしかしたらヒイリーはあの国を抜け出したかったんじゃないか？そこで俺が来た・・・この子には俺が必要なんじゃないか？

「まあいつか」

オルクはヒイリーと一緒に旅をすることに嬉しそうだった。オルクの泣き声が、夜の暗闇の黒と雪の白が混ざり合う世界に響き渡る。

「オオオオー」

第10話 ジンの記憶とオルクの記憶

夜の暗闇をオルクが飛翔していた。

「なあーオルク、俺達の剣でどんなのかな？」

オルクが答える。

（さあな、いずれにしろもう少しでその孤島にたどり着くぞ）

「お、やっぱお前もわかるか？なんか呼ばれてる感じがするよな」

（ああ）

今二人がしていることは「テレパシー」だ。魔龍とドラゴンマスターが行うものだった。

「ねージン、誰と話してるの？」

後ろからヒイリーがかわいらしい声で聞いてくる。ジンは適当に話をごまかす。

「何のことだ？今は独り言だ」

「ウソッ！だって、ジン以外に誰か他の人の声がするもん」

「なにっ！」

（オルク、俺達の話って誰かに聞こえるのか？）

（いや、そんな筈はない。聞こえるにしても他の魔龍が、そのドラゴンマスターだけだ）

ということヒイリーは魔龍のドラゴンマスターということになる。ジンの頭がスノーホールのことを思い出させる。

いや、ヒイリーはドラゴンマスターじゃない・・・それはわかっている・・・

ジンの頭の中に再び「ヒイリーはドラゴンマスター」説が浮かび上

がった。しかし、それを否定する。

「オルク、ヒイリーに俺達の話が聞こえるならもう隠す必要はないだろう」

「・・・そうだな」

「!?!?しゃべった!?!?・・・オルク今しゃべった?」

ヒイリーは愕然とする。今の今まで、ジンとオルクはヒイリーにオルクが話せる事を隠していた。まあ、龍なんだから話すなんて当たり前なんだが・・・もちろんヒイリーはそんな龍の常識を知らない。

「オルクがしゃべれることを何で黙ってたの?」

「それは・・・」

ジンは口を一瞬開いたが、すぐに閉じる。

さて、どうしたものか・・・ヒイリーに本当のことを話すか・・・

「ヒイリー実はオルクには記憶がないんだ」

「記憶が?」

「おい、ジン!」

オルクは焦った様な声を出す。

(いいんだオルク、ヒイリーには知る権利がある)

(・・・)

ジンはテレパシーを使いオルクを黙らせて、ヒイリーに話を続ける。

「ミト婆から渡されたライチの手紙・・・あそこに書かれていたんだ」

「どういうこと?」

「神の復活と、新たな神魔対戦・・・あれは魔龍の子供なら全員知っていることだったんだ。だが、オルクにはなぜかその記憶が生まれた時から無かった」

「え、でも生まれたときに記憶が無いなんて・・・」

「まあ、人間ならそうだな」

そこでオルクが話を引き継ぐ。

「私の親が神を封印しその命がこの世から離れるとき、私達子供に魔法で神の復活のことなどを、記憶させていてくれた筈だったんだ・・・」

「オルクが生まれたとき、オルクは本当に何も知らない赤ちゃんだった。本来なら戦いの記憶は龍から教えもらうことになっていたんだが」

ヒイリーは再び講義する。

「でもジンって黒の魔法を使えるよね？」

「そう、そこがよく分からないところなんだ」

ジンは少し息を吐き、そしてまた息を吸い話し出す。

「ここからは俺の推測なんだが・・・オルクの記憶の一部が俺に入ってきたんじゃないかって・・・」

「えっ！」

ヒイリーは困惑した顔をする。当たり前だ・・・ここから導き出される答えは一つしかないのだから・・・

「それって・・・オルクの親が・・・オルクではなく、ジンに記憶を植えたってこと？」

「・・・俺はそう考えている」

「でも、そんなことをして何の意味が・・・」

「それは俺にもわからない・・・ただ、そこには何らかの理由があったと俺は思う」

オルクは今までの話を黙って聞いていた。ジンの推測は前もって聞いていた。複雑な気持ちだった。

私の親は・・・私を見捨てたのだろうか？・・・オルクの心の中では、さつきからずっと同じことを思っていたのだった。

それからしばらくした後・・・

「あれじゃないのか!?!」

ジンが声を張り上げる。ジンの指差す方向には孤島かはわからなかった。それもその筈。黒い雲が周りを取り囲み、来る者を拒んでいくかのようにだったからだ。

「あれが、ジンが夢で見た孤島?」

「ああ」

ヒイリーはジンに確認し、それは肯定される。

(あそこに、黒のドラゴンマスターの剣があるのだな・・・)
オルクはジンにテレパシーをする。

(ああ、行こうぜオルク!)

第11話 ジンと黒の魔龍グラン

その孤島は暑い黒雲に覆われている。ジンはどうやって入ろうかと考えていると、近づいてくるジンとオルクに反応するように黒雲は虚空へと消える。それはジンとオルクを呼んでいるようだった。

オルクに乗ったジンとヒイリーは、孤島に上陸する。そこは黒い霧に覆われていて視界が利かない場所だった。しかし、ジンとオルクが足を踏み入れたところは黒い霧は晴れる。

ジンは地を足をつけずに、オルクに乗ったまま孤島にある洞窟を探すことにする。

孤島には生物はいないようだった。今いるのはジンとヒイリーとオルクだけだった。

ここが白の魔龍ミアバートが俺に見せた道しるべの孤島・・・変だな？・・・

ジンには夢で見たものより少し変わっているように見えたのだった。

夢で見た孤島では雷が鳴っていた筈だったが、ジンが訪れたときには雷はなっていないかった。

それに、夢で見たときより静か過ぎたのだった。今ジン達のいる孤島は、どす黒いオーラを放っていた。

ジンが夢で見たときは、もっと華やかで小鳥のさえずりが聞こえる場所だった。

この孤島はさほど大きくはなかった。加えて、ジンが夢で見たときの手がかりがあったので、目的の洞窟は早く見つかった。

洞窟の大きさは一人一人がやっとは入れる大きさだった。ジンはオルクに「ここで待っていてくれ」と命令する。

ヒイリーはジンについて来ようとしたが、ジンはそれを止める。

この孤島は、黒の魔龍とその相棒トウゴンのドラゴンマスターの孤島だ。関係のないヒイリーが入ってきてても大丈夫かどうかもわからないのに、ドラゴンマスターの剣が収められている洞窟に入ると、それこそどうなるか分からなかったからだ。

ジンは洞窟に一步足を踏み入れる。洞窟の中は真っ暗だったが、ジンが足を踏み入れると洞窟の壁につけられていた灯火に、一斉に灯がともる。

驚きながらさらに歩を進めるジン。洞窟の中はひんやりしていた。

夢で見た洞窟では、そこまで深くはなかったはず……

ジンは夢の洞窟を思い出しながら洞窟の中を突き進む。ジンが思ったとおり、洞窟の階段は途中で姿を消した。

「あれ？階段は……」

すると、洞窟の壁についていた灯火が奥の部屋へと一気に広がった。灯火の光がジンの視界を広げる。そこにあったのは、ジンが夢で見たものと同じだった。ジンの目の前にあるものは、一つの剣と石。剣は黒く輝き、石は赤色の輝きを放っていた。剣が収められている部屋にジンは足を踏み入れる。

パアアア……ジンが足を踏み入れた瞬間、部屋の床が淡く輝きだしたのだった。

「なんだっ？」

ジンが驚きの声を出したとき、ジンの耳にどこからか声が響いた。

(待っていたぞ)

その声は、重く、どこか心地よくジンに語りかけてくる。

「?、この声は?……」

ジンにはその声にどこか聞き覚えがあった。

「お前は・・・グラン・・・なのか？」

(黒のドラゴンマスターよ・・・よくここまで来た・・・)

ジンに語りかけてくる声は、ジンの質問には答えなかった。だがこの声を聞き、ジンは確信していた。

この声は間違いない・・・グランだ！・・・

「グランッ！どこだどこにいる!？」

(お前がここに来た目的は一つ・・・)

声の主はジンの問いに何一つ答えようとはしなかった。それにこの声はジンの耳から聞こえる声ではなかった。

・・・この声は心から響く感じた・・・テレパシーか！・・・グランはこの声を魔法でこの洞窟に録音して・・・そうだよなグラン・・・お前が生きているわけがないよな・・・お前は・・・

ジンは洞窟から心に語りかけてくる声に懐かしさを覚えていた。この声をジンが聞いたのは15年前のことだったのだから。

(黒のドラゴンマスターよ・・・受け取るがいい・・・この洞窟に収められし、黒の聖剣「黒龍剣」・・・黒の宝玉「レッドストーン」・・・)

ジンはグランの言葉を聞き、顔をうつむける。しかし泣いているの

ではなかった。ジンの口端は目尻に寄せられていた。そうかグラン・・・お前は自分の息子に・・・心の中で、ジンは一つの答えを導き出していた。

「グランッ！お前が何でお前の息子ではなく俺に記憶を与えたのかは、俺にはわからない・・・」

ジンはもうこの世にはいないグランに向かって叫ぶ。虚空から響き渡る声は、ジンに与えることがなかった記憶を語りだした。

（これより神が復活し、新たな神魔大戦が始まるだろう・・・お前は黒の魔龍と他の魔龍・ドラゴンマスターと共に再び神を封印するのだ・・・）

「そこにはきつと理由があり、俺たちにしばらく旅をさせたんだろう!?・・・お前の息子・・・いや、オルクのことを思って」

（その時お前たちの命は失われることだろう・・・）

「神魔大戦が始まったら、オルクはきつと・・・死ぬことになる・・・だからお前は、オルクが死ぬ前に旅をさせたかったんだろう?」

（だから、お前たちはそのときまでに・・・）

グランはジンとオルクが死ぬ前にやるべきことを告げようとする。ジンはその言葉をかき消すように叫んだ。

「そんな心配はするな！グランッ！オルクは俺が絶対に死なせない！俺たちは生き残ってみせる！・・・神が復活するまでに力をつけて、封印なんてしなくても・・・俺が・・・俺たちが必ず神をぶ

「たおしてやる！！！」

(.....)

洞窟は静まり返った。ジンに聞こえてくるグランの声は魔法で記録したものだ。それが止まった。まるで、

ジンの言葉を聞き、その先を言う必要がなくなったと言わんばかりに.....

ジンにはグランが笑っているように感じていた。それが魔法によるものか、天国にいるグランのものか.....それは定かではない。

グランは最後に、黒のドラゴンマスターの目的を果たさせようとする。

(黒の聖剣「黒龍剣」.....黒の宝玉「レッドストーン」.....持つてゆけ.....)

ジンにそう告げ、グランの声は完全に消えた。虚空に響き渡るグランの声は洞窟で反響し、ジンの心に残り続けていた。

グラン.....俺に任せる。オルクは絶対に死なせない.....

ジンの目の前に収められている黒の聖剣と黒の宝玉、ジンはそれを掴む。そして、もう聞こえなくなった声に返すようにジンは洞窟の中で叫ぶ。

「黒の魔龍.....グラン。黒のドラゴンマスターに与えられし、黒の聖剣「コークソード」.....黒の宝玉「レッドストーン」、黒のドラゴンマスタージンが、ここに貰い受ける！」

ズオツ！ジンは黒の聖剣と黒の宝玉を引き抜いた。すると、黒の宝玉はジンの手に沈んでいく。

「なんだっ！？」

それは突き破っているのではなく、ジンの皮膚に体に溶け込んで入っているようだった。

スウツ・・・軽い音を残し、黒の宝玉はジンの体に完全に取り込まれたのだった。痛みはなかった。逆に心地良かったくらいだ。

ジンはもう片方の手に握っている黒の聖剣を見つめる。黒の聖剣は少しずつ薄れていく。やがてその姿は、虚空へと消えた。それを見ても、ジンは特に驚くことはなかった。

体に力が溢れて来るようだ・・・

ジンの体に入り込んだ黒の宝玉は、ジンの体と同調し、ジンに力を与えたのだった。

その時、至福の時を悲鳴の金切り声が引き裂いた。

「ジンーーーーー!!」

ジンに届いた悲鳴はヒイリーのものだった。我に返ったジンは、元来た道に戻るため、体を反転させる。

「どうしたーヒイリー!!」

第12話 ガーゴイルと新たな力

ジンは一気に洞窟の階段を駆け上がる。地上に出た時にジンが見たものは、捕らえられているヒイリーの姿だった。

捉えているのは人間ではなかった。昆虫のような甲殻を身にまとい、その甲殻からは角が生えていた。その生物の鋭い爪は、人なんか簡単に裂けそうなほど鋭く、目は邪悪に満ちている。

ジンはオルクとテレパシーを行う。

（オルク奴等は何だ？）

（あの甲殻に、悪魔のような目・・・奴等は恐らく「ガーゴイル」だろう）

（ガーゴイル！？）

（ガーゴイルとは、神が人間を殺すために創造した生物だ。一体ならばたいしたことはないが、集団ではかなり厄介なやつらだ）

ジンの目の前にいるガーゴイルはかなりの数だった。50対はいるだろう。

オルクが話しかけてくる。しかし、今度はテレパシーではなく直にでだ。

「ジン！奴等は理性がない。本能の赴くままに人間を殺すだけだ！ヒイリーを早く助けるんだ！」

「・・・分かった」

不思議だ・・・ガーゴイルがあんなに近くにいるように感じる・・・

今のジンに焦りはなかった。しかも、今ガーゴイルとは50mは離れていた。そんな中でも、ジンの心には焦りは生まれぬ。その原因が黒の聖剣と宝玉を手に入れたからだ。

ジンの瞳に映るガーゴイルがヒイリーの体を両手に持ち上げていた。ヒイリーは気を失っているようだ。ガーゴイルは嬉しそうな雄たけびを上げる。ヒイリーを持った手に力がいり、ヒイリーの体の腰の辺りから嫌な音なる。ヒイリーの体を二つに千切るつもりのようなのだ。

それを見たジンは右手を前に突き出し、その人差し指をヒイリーを捕らえているガーゴイルに向ける。

「オルク、ヒイリーを頼むぞ」

「何？」

ジンの体から黒い魔力が流れ始める。だが、その魔力は以前のように荒々しくなく、川のように落ち着きを払っているかのようなのだ。ジンは静かに唱える。

「黒点！」

人差し指に集められた魔力が一気に放出。黒点はガーゴイルに向かって一直線に飛んでいく。

「ゴア？」

ガーゴイルが自分に向かってくる黒点に気づく。何がなんだか分からずに、ガーゴイルは黒点に激突。ガーゴイルの体は黒い魔力に包まれ、そして貫かれた。そこには一瞬の間も無く、まるでガーゴイルの体が消滅したようだった。

ガーゴイルの両手だけがこの世に残った。支えを失ったヒイリーの体が、重力により重心の重い頭から地面に落ちようとする。

「オルク、今だ！」

「！」

ジンの掛け声に、啞然としていたオルクは我に振り返りヒイリーに向かって高速飛行する。ヒイリーの頭が地面に触れようとしたところで、オルクが何とかキャッチする。

「よし！」

ガッツポーズをするジンはガーゴイル達の方に振り返る。ガーゴイルはかなり怒っていた。しかし、仲間を殺されたことに怒っているのではなく、人間を殺せなかったことに起こっているようだった。

「哀れな生き物だ・・・オルク！」

ジンははるか上空を飛んでいたオルクを呼ぶ。オルクはジンの元に近づく。

「OK！オルクそこでいい！」

地面から10mくらい離れたところでオルクを止める。ジンはタンツ！と地面を蹴り上空に舞う。オルクの体に足をつけ、地面で騒いでいるガーゴイル達をジンは見下ろす。

「どうしたのだジン？」

「ちょっと試したいことがあるんだ」

オルクにジンは少し嬉しそうに言う。そして、ジンは右手から炎を出した。オルクが驚きの声を出す。

「それはっ！？」

ジンはオルクに答えようとはせず、頭の中で炎をイメージする。

あいつらの周りに炎陣をイメージ・・・

すると、ガーゴイル達の周りに炎の壁が出現した。炎の壁はガーゴイルを逃がさないかのように周りを包み込み、退路を断つ。そこでジンはさらにイメージ。

ガーゴイル達の周りの炎は次第に大きくなり、地面に足をつけたまま上空を塞いでいく。たちまち、ガーゴイル達は炎の壁に包まれた。炎の壁は空間内にかかりの熱を発し、20分もいれば体は灰になりそうなほどだった。

人間達より、強固な体を誇るガーゴイル達も熱には適わなかった。炎の空間ではどんどん気温が上がっていった。上空にいるジン達にも、ガーゴイル達の呻き声が聞こえてくる。

ジンは右手を前に突き出す。右手を開いた上体から、徐々に握り締めていく。それに伴う様に、ガーゴイル達を包む炎が収縮していく。炎の球体はどんどん小さくなり、ガーゴイル達の何体かは炎に焼かれ死んでいた。

もういいだろう・・・

そこでジンは右手の拳を一気に握り締めた。

ギュウツッ！ バーン！

拳を握り締める音と、爆発音が同時に響いた。

炎の球体が内側から一気に爆発したのだった。中にいたガーゴイル達がどうなったか言うまでもない。爆発の余波による熱風が、オル

クを襲った。魔龍にとつてはたいしたことはなかったが、人間が浴びれば軽く皮膚が溶けえるほどの熱だ。

「……う、うううん」

爆発や熱風の衝撃で、気絶していたヒイリーが目を覚ました。ヒイリーが目を覚ましたときには、爆発による黒煙は消えていた。そこから姿を現したのは地形が変わった孤島の姿だった。ヒイリーが来た時に見た地面は捲れ上がり、僅かに生えていた草木が黒炭となって風に舞っている。

「……ジン？」

ヒイリーは寝ていたかのように、寝ぼけたような目でジンを見つめる

「お目覚めか？ヒイリー」

「私……どうして……」

ヒイリーには何かなんだか分からないようだ。そこで、自分が捕らえられていたことを思い出す。ジンとオルクを交互に見つめ何があったか状況を察する。

「ジン……うわーん」

ヒイリーは泣いた。ジンの胸に飛び込み、しばらくの間泣き続けた。幼い少女にはやはり怖い出来事だったのだろう。人間を殺すガイゴイルに捕まり、気絶していたとはいえ、その体が二つになるところだったのだ。

ジンはヒイリーの気の済むまで泣かしてやる。オルクはヒイリーが泣いている間、孤島の上空を旋回していた。

一通り泣き止んだヒイリーが、地形の変わった孤島の大地を見てジンに問う。

「……ジン、これは？」

爆発の跡を見てもヒイリーの驚きは少なかったようだ。どうせジンがやらかしたに決まっている……そう思っているからだった。

「爆発の跡」

ジンは棒読みで言った。

「見れば分かるよ！」

「・・・俺がした」

「それも分かる！」

ヒイリーは少し怒った口調で言った。

「・・・からかうのはその辺にしておけ、ジン」

オルクが注意してきたので、ジンもやめることにする。

「これは・・・俺の新しい力だ」

「新しい力？」

ヒイリーが小首をかしげる。

「ジンよ、あの洞窟で何があったのだ？」

「・・・あの洞窟では、俺が夢で見たとおり黒の剣と宝玉があったんだ・・・」

ジンはあの洞窟であった出来事を話した。その話で時間が過ぎ、あたりはすっかり暗くなった。ジンは洞窟から聞こえてきた声の主については話さなかった。ヒイリーに聞かせないためだ。

「・・・どうせ、後からしつこく聞いてくるだろうからな・・・」

夜になったということもあり、ヒイリーは眠った。そこで、ジンはオルクにグランのことを話し始める。

「オルク・・・俺はお前のドラゴンマスターだ・・・お前が心に感じていることくらいは分かる」

「！！」

ジンは見抜いていた、いや、感じていた。オルクの感じている不安や悲しみを。二人は運命共同体の仲間だった。互いに感じているこ

とを隠すことはできない。オルクの感じていた不安・・・それは

「お前は、親に見捨てられたんじゃないかって感じていたんじゃないか？」

「・・・」

「・・・やはりな」

オルクは自分の感じているものの正体を悟られないために黙っていたが、逆にそれはジンに確信を与えた。

「お前には話していないことがあったな・・・まずお前の親の名前は「グラン」だ」

「！？ジン・・・なぜお前が私の親の名前を・・・いや、そんなことはどうでもいい。それは本当なのか？ジン」

オルクの声は至って普通のものだった。しかし、そのドラゴンマスターのジンは感じていた。親の名前を知ったオルクの喜びを。

「ああ、本当だ。俺が洞窟で聞いて声の主・・・それがグランだったからだ」

オルクは喜びの感情をジンには隠そうとはしない。どうせ分かってしまうからだ。だが、それと同時にジンにはオルクの疑問の感情が伝わってきていた。

「ジン、なぜお前は私の親の名前を？」

「・・・それを話すには少し昔話をする必要があるんだ。聞いてくれるか？」

ジンがオルクに確認を取る。オルクにとっては聞かれるまでもないことで、その長い首を立てに振った。

「あれは今から15年前・・・俺が生まれたときだ」

第13話 グランの言葉とオルクの涙

「国の名前は『チャータ』、そこで俺はあるひとつの民家の家で命を授かり生まれた……」

ジンの言葉は、子供に昔話を聞かせる老人のようなものだった。

「もう頭まで出ていますよ。がんばってください」

看護師が今子供を産もうとしている女性を励ます。その横では女性の夫が心配そうに、その様子を見ていた。

「うん、ん！」

女性の悲痛の声。その声を聞いて、遠くから走ってくる子供のよう
に、女性の胎児は出てくる。

「……ん!!」

「……おぎゃー、おぎゃー」

部屋の中に響き渡る赤ん坊の声。その子を抱き上げた看護師が嬉し
そうに言う。

「無事生まれましたよー、これで今日からお母さんですね。元気な
男の子ですよー」

看護師から渡される赤ん坊。女性は受け取り、その子の名前をつぶ
やいた。

「ああ、私の赤ちゃん。あなたの名前は『ジン』。私がお母さんよ

ジンの目の前にある焚き火が、ジンの顔を夜の暗闇に赤く照らして
いた。

「……そうして俺は生まれたんだ」

「……お前にもそんな時代があったのだな……」

「当たり前だろ！」

割と本気な口調で呟いたオルクに、ジンは苦笑する。

「……そこで俺はひとつの声を聞いた」

「声？生まれたときにか？」

「うん、まあ俺が生まれたときの話をしているんだから、俺が生まれたときのことなんだがな」

ジンに馬鹿にされたオルクは少し怒る。それでも、話を早く聞きたかったのでジンに先を促す。

「まあ、俺が生まれたときだからよく覚えていないんだ。……つか全然」

人は赤ん坊だったころの記憶を持っているはずはない。ジンも叱りだが、ジンは本当にそんなことがあったように言うのだった。

「なら何故？」

「いや、多分そんなことがあったなーって。現に俺はグランの声と名前を覚えていた」

「……」

あいまいに言うジンに、オルクは少し呆れた。

「そこでその声は俺にこういったんだ。『我の名は……』」

(……) 我の名はグラン。黒の魔龍だ。今からお前に大切なことを伝える。心して聞け』()

ジンが生まれたときに語りかけてくる声。まだ赤ん坊のジンには理解できるはずはなかった。

「どうしたのジン？」

今ジンを生んだ女性が、ジンの様子を奇妙に思い不安な声をかけて

きた。今のジンは何もしゃべってはいなかったのだ。人が生まれたときに上げる産声の泣き声。あれが出せない赤ちゃんは何かしらの病気と思われてしまう。

最初は泣いたジンだったが、心に語りかけてくるグランの声を聞いたとたん泣き止んでしまったのだ。

（お前の近くには卵が埋まっている。黒の魔龍の卵だ。お前はその卵を5歳になったときに見つけるんだ。卵はお前に見つけられたとき孵せようにしてある。そして15歳になったら旅に出る。その間に誰にも魔龍のことは知られてはいけない。・・・本来ならばお前には言わなければならぬことがある。お前の存在意義についてだ。・・・お前は私の子供と一緒に旅に出てやらなければいけないことがある。・・・今から私の言うことは私の望みだ！お前の使命ではない！私の子供と一緒に旅に出て・・・楽しませてやってくれ！私にあの子には何もすることができない。龍として、何より親として！だから頼む！！あの子を楽しませてやってくれ！！あの子の名前は『！』）

ジンの心に語りかけてくる声は消えた。元々魔法で記録されたものなので、そのときに言った言葉しか言えなかった。

「あの子の名前は『オルク』・・・グランはそう言って消えた」

ジュウウ・・・焚き火の火が消えた音。大粒の涙によって火は消えてしまった。

「それでは・・・私の名前は・・・」

グランの声は震えていた。ジンは感じている。オルクの気持ちを。

「ああ、オルク・・・お前の名は紛れもないお前の親がつけたもの

だ・・・」

ジンの言葉を聴き、ジンに流れてくる感情の波が一気に強くなった。

私は親に見捨てられてはいなかった！！

「今のグランの言葉は洞窟を出た後に思い出したんだ・・・グランのやつ俺に封印か何かかけていたんだろう・・・そして洞窟を出た時にそれが解除されるように仕込んでいた・・・」

「・・・」

オルクは何も言わなかった。ジンはそんなオルクに優しく言葉をかける。

「よかったじゃねーか！お前の名前はお前の親がつけた名前！お前はグランに、グランの命が尽き果てるその瞬間まで・・・愛されていたんだ・・・」

「オオオーーーーンンン、オオオオオーーーーン」

オルクは吼えた。それは人間で言う『叫ぶ』だ。その叫びは嬉しさに満ち溢れていた。

今、東の山から太陽が昇り朝を告げる。日の出の淡く眩しい光はジン達を照らす。

ジンの後ろでもそもそと何かが動く。ジンが振り向くとそれはヒイリーで、オルクの叫びと朝日の眩しさで目が覚めたようだった。ヒイリーが泣いているオルクみて不思議な顔をする。

「・・・なんでオルクが泣いてるの？」

「え、そりゃあ・・・」

ジンは昇った朝日を見ながら、ヒイリーの問いに答えた。

「・・・嬉しいからだろ？」

一日の始まりをオルクが告げた日だった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7034z/>

ジンとオルクの旅

2012年1月4日23時53分発行